

中国研究文献 2

創造社資料

第 1 卷

伊藤虎丸編

アジア出版

1979

使用底本

東京大学文学部中国文学研究室蔵

創造季刊

桜美林大学附属図書館蔵

創造季刊(第1巻第1期 再版 横組)

創造社資料 第1巻

中国研究文献 2

1979年2月発行

全10巻 ¥80,000

編 者 伊 藤 虎 丸

発 行 ア ジ ア 出 版

182-91東京調布局P.O.BOX13

製 作 汲 古 書 院

102東京都千代田区飯田橋2-5-4

電話03(265)9764振替東京5-158035

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

序 言

——「創造社資料」の刊行に当って——

伊 藤 虎 丸

創造社は、周知のように、中国新文学の草創期に、文学研究会と並んで文壇を二分した文学結社である。その活動の歴史その他詳しいことは、本『資料』最終巻の巻末に収録を予定している「解題」ならびに「年表」に譲ることとして、ここでは、本『資料』に収録した資料の範囲（収録出来なかった一部の雑誌のことも含めて）を明らかにしておくということに中心を置いて、ごくかいつまんで、二、三のことだけを述べて、刊行の言葉に代えたい。

創造社について

創造社の歴史は、1921（大正10）年7月初旬のある日、東京本郷にあった郁達夫の下宿に、郭沫若を中心に集まった数人の日本留学生が、かねて計画中だった『純文学雑誌』を発刊すること、誌名には「創造」という名前を使うことを決めた時に始まり、1929年2月、国民党官憲の弾圧によって、上海の創造社出版部が封鎖され解散に追いこまれた時までと、一応考えられる。

この約7年間の歴史は、通常二つあるいは三つの時期に分けられ、それぞれ、前期創造社、後期創造社、あるいは後期を二つの時期に分けて、第1期、第2期、第3期と呼ばれている。

第1期（あるいは前期）は、創造社成立の翌年、1922年5月に、上海の泰東書局から機関紙「創造」（季刊）を発刊したのを最初に、「創造週報」「創造日」を相継いで刊行した時期。すでに成立していた文学研究会に対抗して、それが「人生派・写実派」と呼ばれたのに対して、これは「芸術派・浪漫派」と呼ばれた時期でもある。同人は、郭沫若、郁達夫、成仿吾、張資平、田漢、鄭伯奇、何畏、陶晶孫などであ

った。

第2期は、右の第1期の刊行物が、23年冬から24年夏にかけて相いついで停刊したあと、1年余りの空白をおいて、1925年9月、「洪水」（半月刊）が「復活宣言」をし、翌26年には創造社出版部が作られ、「創造月刊」その他が発刊された時期。いわゆる「創造社の左旋回」が始まった時期でもある。同人にも、周全平・蔣光慈・葉靈鳳など若い世代が加わる。

第3期は、27年、同人の間に内紛が起こり、郁達夫の離脱などのことがあったあと、1928年1月、馮乃超らを中心に「文化批判」（月刊）を発刊した頃から29年2月解散までの時期。4・12クーデターのあと、創造社が、新たに日本留学から帰国した若い同人たちを中心に、プロレタリア文学の旗幟を鮮明にした時期である。

* * * * *

以上のような創造社の文学運動が、私の関心をそそる第一の点は、それが、最初日本の東京において日本留学中の学生たちによって設立された団体だったということからも容易に推察されるように、日本近代文学からの極めて強い影響を受けていることである。初期の創造社に見られる現実社会への反抗を基調としたロマンティズムやある種の芸術至上主義が、大正期の新浪漫派の影響を強く受けていたことはつとに言われていることだし、また「革命文学論戦」の中で大きな役割を果たした第3期創造社のマルクス主義文芸理論についても、日本帰りの若い留学生がもたらした日本のプロレタリア文芸理論の影響が大きかったことは、これまた屢々指摘されてきたことである。——ここには、日中文化交流史の問題としても、まず、さまざまな事実関係自体からして、多くの興味ある問題があるし、両国近代文学の比較研究にとっても、大事な手がかりを与えてくれるものがあると考えられる。

このような、日本文学の影響ということにかかわって、第二に、私の関心を惹くのは、こうした創造社の文学運動が、中国現代文学史の中に占める位置、果たした役割の問題である。周知のように、創造社は文学研究会と共に中国現代文学における最初の「文壇」とでもいうべきものを形成した。両者の対立は、郭沫若の言うごと

く、「文人相軽ズ」式の旧式な文士気質やギルト意識のあらわれにすぎなかった、と言える側面は確かにあっただろう。だが、それにもかかわらず、そこには、文学観乃至は方法意識の点で、やはり、ある差異が認められるのではあるまいか。そして、この二つの流れが対立と統一とを繰返しながら、今日の中国文学を作ってきた、という風には言えないだろうか。

創造社の側についていえば、前期創造社の「ロマン主義・芸術至上主義」と後期創造社の「革命文学」の標榜との間には、一見、大きな飛躍、断絶が見られるが、同時にそこには（なぜ、「人生派・写実派」と呼ばれた文学研究会の流れの方からではなく、創造社においていちはやくこのような転換が起こったか、という問題をふくめて）、日本文学からの影響ということともかかわる問題として、いわば“創造社的。とでも言うべきある一貫した文学観のようなものも認められるのではないだろうか。あたかも、日本プロレタリア文学と大正期の「私小説」との間にある連続性が指摘されるのと同様に——。そして、このような（差し当たり仮に“文学研究会の。と“創造社的。とでも呼んでおくほかないが）二つの文学観という問題は、実は今日の中国文学をどう理解するかということにもかかわって、中国現代文学史の研究に少なくとも一つの視点を提供するものではないだろうか……。

ともあれ、以上二点、私なりに関心を抱く問題に限って言っても、今日、「四人組」追放以後の中国の変貌ぶりの中で、日本近代との比較において中国近代をどのように理解すべきかという課題が、あらためて中国研究者に問われている時に、それらは、すぐれて今日的な意味を持つ問題であるように、私には思われる。しかも、こうした意味を持つと思われる我が国における創造社に関する研究は、いわばまだその緒についたばかりである。文化交流史の問題としても、事実関係だけに限っても、まだまだこれから明らかにされなければならない問題は多い（最終巻の巻末に収録されるはずの、小谷一郎氏編による「創造社年表」は、この点についての今日までの研究の到達点を提示してくれるものと、私は期待している）。そしてこのような研究の遅れの原因の一つには、戦後30余年、中国との国交が絶えていたこととも関わって、

国内において第一次的な資料を見ることが甚だ困難だったという事情があったことは、やはり否定出来ないだろう。今回の「創造社資料」の刊行が、こうした事情を多少とも緩和し、我が国における中国研究に便宜とまた刺激を与えるものとなることができたというのが、編者の任を与えられた者としての願いである。

「創造社資料」について

本『資料』には、現在日本国内で見ることのできる第1期及び第2期創造社の機関誌（乃至はこれに準ずるもの）のすべてを収めたつもりである。

当初企画に当っては、出来るなら国外にあることが知られている雑誌をふくめて、我が国ですでに影印本が出版されている「文化批判」（中国資料叢書11 中国現代文学史資料第11巻 1968年10月 大安）を除く創造社の機関紙等のすべてを搜集して収録したいと考えた。しかし、国外の資料の入手には現在でも様々な困難があり、今回はこの希望を果すことが出来なかった。私たちとしては、今後も国外にある資料の入手のための努力を継続し、いずれ本『資料』の「補篇」の形でこれを公刊したいと考えている。日中平和条約締結によって、こうした面でも道が開かれることを期待すると共に、この機会に、各位の御援助と御教示とをお願いしたい。

また上に「国内にある資料のすべて」を収録したと書いたが、これも私たちの知る限りのことであって、私たちの調査に粗漏は免れないであろうことを恐れている。この点でも、本『資料』の出版を機会に、さまざまな御教示、御叱正が頂ければと願う次第である。

本書に収録した創造社関係の雑誌等の誌名、発行期間等々については、巻頭の「総目次」を参照されたい。（「創造」季刊には、タテ組みとヨコ組みの二つの版があったことが知られているが、併せて収録して対校の便に供することし、製本上の都合で最初出版されたタテ組みのものを第1巻の巻尾に置いた。）

これらの雑誌の中、上のような事情から、非常に残念ながら欠号を埋めることが出来なかったものは、次の通りである。

「創造月刊」第2巻第5・第6期欠

「洪水」(半月刊)第3巻(第25期~36期)欠

「新消息」第2期・第3期欠

なお、これらのほかに、現在までのところ私たちが既刊の目録類や他の雑誌に載った広告等でその存在を知るだけで、今回も見る事が出来なかった創造社の刊行物(および今回収録しなかった雑誌)には、以下のようなものがあることが知られている。

誌名	発行期間	既知の巻号	備考
A11	(1926 .4 ~)	1 ~ 5	
幻洲	(1926 .5 ~ 6)	1 ~ 2	
新消息	(1927 .3 ~ 9)	1 ~ 3	(1期のみ本資料に収録)
文化批判	(1928 .1 ~ 5)	1 ~ 5	既に影印本があるため収録せず
流沙	(1928 .3 ~ 5)	1 ~ 6	
畸形	(1928 .5 ~ 6)	1 ~ 2	
思想	(1928 .8 ~ 12)	1 ~ 5	
日出	(1928 .2 ~ 12)	1 ~ 5	
文芸生活	(1928 .12 ~ 1)	1 ~ 4	
新興文化	(1928 .8)	1	
新思潮	(1929 .11 ~ 30 .4)	1 ~ 6	(5期のみ東洋文庫に所蔵)
新思想	(1930 .7)	7	

(『中国現代文学期刊目録』上海文芸出版社1961による)

これらの大部分は、第3期創造社に關係する刊行物である。このうち「新思潮」は、第5期のみではあるが、東洋文庫に所蔵されていて影印可能であったが、その内容が直接文学とは関わらないものが多いこともあり、時期的にもむしろ、他と一括して出版出来る時期を待つ方がよいと考え、今回は外した。これらのうち「流沙」「思想」「日出」「新興文化」「新思潮」は、すでに中国において影印されていること

が知られている。すでに述べたように、今後、何らかの形で、これらの資料が私たちにとって利用可能なものとなることが切望される。

おわりに、影印に当っては、所蔵諸機関ならびに飯田吉郎氏から、まことに好意に満ちたご配慮を頂いた。ここに記して、心からの感謝の言葉に代えたい。

1979年1月

創造社資料 全10巻 総目次

第1巻

序言	——「創造社資料」の刊行に当って——	伊藤虎丸
創造(季刊)	第1巻第1期～第2期, 第1巻第1期再版(横組)(1922・3～1922・8, 1923・6)	泰東図書局

第2巻

創造(季刊)	第1巻第3期～第4期(1922・11～1923・3)	泰東図書局
--------	----------------------------	-------

第3巻

創造(季刊)	第2巻第1期～第2期(1923・7～1924・2)	泰東図書局
--------	---------------------------	-------

第4巻

創造週報(彙刊)	第1集第1期～第26期(1923・5～11)	泰東図書局
----------	------------------------	-------

第5巻

創造週報(彙刊)	第2集第27期～第52期(1923・11～1924・5)	泰東図書局
----------	------------------------------	-------

創造日(彙刊)	第1期～第100期(1923・7・21～10・31)	光華書局
---------	----------------------------	------

第6巻

洪水(週刊)	第1期(1924・8・20)	泰東図書局
--------	----------------	-------

洪水(半月刊)	第1巻第1期～第12期(1925・9・1～1926・3・1)	光華書局
---------	--------------------------------	------

洪水(週年増刊)	(1926・12・1)	創造社出版部
----------	-------------	--------

第7巻

洪水(半月刊)	第2巻第13期～第24期(1926・3・15～12)	創造社出版部
---------	----------------------------	--------

第8巻

創造月刊	第1巻第1期～第5期(1926・3・1～1926・7・1)	創造社出版部
------	-------------------------------	--------

第9巻

創造月刊	第1巻第6期～第11期(1927・2・1～1928・5・1)	創造社出版部
------	--------------------------------	--------

第10巻

創造月刊	第1巻12期～第2巻第4期(1928・6～11・10)	創造社出版部
------	-----------------------------	--------

新消息	創刊号(1927・3・19)	創造社出版部
-----	----------------	--------

解題		伊藤虎丸
----	--	------

創造社年表		小谷一郎
-------	--	------

目 次

創 造 季 刊

序 言	伊 藤 虎 丸
第1卷 第1期 (1923・6 再版 横組)	3
第1卷 第2期 (1922・8)	195
第1卷 第1期 (1922・3 初版 縦組)	3

創造季刊



文藝季刊

第一卷 第一號

創造者(詩).....	郭沫若
棠棣之花(戲劇).....	郭沫若
她懷望着祖國的大野(小說).....	張資平
咖啡店之一夜(戲劇).....	田漢
茫茫夜(小說).....	郁達夫
上帝的女兒們(小說).....	張資平
一個流浪人的新年(小說).....	成仿吾
少年維特之煩惱序引.....	郭沫若
藝文私見.....	郁達夫
淮南特著杜蓮格來序文.....	達夫譯
海外歸鴻(三封信).....	郭沫若



創 造 者

郭 沫 若

海上起着漣漪，
天無一點纖雲，
初昇的旭日，
照入我的詩心，
秋風吹，
吹着庭前的月桂。
枝枝搖曳，
好像在向我笑微微。
吹，吹，秋風！
揮，揮我的筆鋒！
我知道神會到了，
我要努力創造！

我喚起周代的雅伯，
我喚起楚國的騷豪，
我喚起唐世的詩宗，
我喚起元室的詞曹，
作「吠陀」的印度古詩人嘍！

作「神曲」的但丁喲!

作「失樂園」的米爾頓喲!

作「浮士德悲劇」的歌德喲!

你們知道創造者的孤高,

你們知道創造者的苦惱,

你們知道創造者的狂歡,

你們知道創造者的光耀。

昆侖的積雪,北海的冰濤;

火山之將噴裂,宇宙之將狂颳;

如酣夢,如醉陶,

神在太極之先飄搖。

偉大的羣星喲!

你們是永不磨滅的太陽,

永遠高照着時間的大海。

人文史中除却了你們的光明,

有甚麼存在的價值存在?

我幻想着首出的人神,

我幻想着開闢天地的盤古。

他是創造的精神,

他是產生的痛苦。

你聽,他聲如豐隆,

你聽,他吁氣成風,

你看,他眼如閃電,